

文学部自然地理学・地域学講座

不精者のための情報化

中田 高

はじめに

今、情報化の大波が世間を襲い、やれマルチメディアだインターネットだという流行りの語句がいやでも耳に入ってくる。そして、広島大学における情報化と情報教育をいかに行うべきかが議論されるところとなっている。

大学の情報化は、構成員に関心があるうがなかるうがここ数年で急激に進むことになるが、その方向はまだ定まっていようには思えない。

もし、一部の専門的な構成員の嗜好にしたがつて情報化が進むことになれば、将来に大きな問題を残す可能性がないとはいえない。

広島大学の情報化が教職員や学生などの構成員にとつてどのようなものであつて欲しいか、不精者であるがゆえにコンピュータを文具として使っている者の一人として、無知とのそしりを恐れず希望を述べたい。それは、せっかくならば多額の税金を使つて行われる情報教育や情報化ならば、多くの構成員にとつて役に立つ使いやすいものになることを念ずるからにはほかならないからである。

私の周辺の情報化の現状

文学部では移転を機に、全ての教官研究室と講義室が学内LAN (Local Area Network) Ⅱ学内情報ネットワーク) によってイ

ンターネットと接続され、研究・教育に利用することが可能になっている。私もその恩恵を受け、研究室での一日は電子メールを読み、これに答えることから始まる。

国の内外の研究者と簡単に情報交換を日常に行へる環境が整い、外国での学会の招待や共同研究の話が飛び込んで来るのもめづらしくなくなった。また、私の講義はまだ不完全なものではあるが、自分の研究室のコンピュータに蓄積された教材を講義室のコンピュータに呼び出し、それを大型のテレビ画面や液晶プロジェクトでスクリーンに映し出して行っている。講義に利用できる既製の教材はまだほとんどないため、多くの教材はスキャナーやグラフィックソフトを使つて作成した写真や図など単純なものが多いが、なかにはプレゼンテーションソフトを用いて変化のある教材に仕上げたものもある。

また、きわめて初歩的なものではあるがWWW上にホームページを作り、今後これを充実して行こうと考えている。

このように書く、私がコンピュータに精通しているかと誤認される向きもあるが、そうではない。私はコンピュータのハードウェアについての知識もなく、プログラミングも全くできない単なるソフトウェアの利用者に過ぎない。

それどころか、私は大のコンピュータ嫌いであつた。今から二十年以上も前に情報処理教育で「FORTRAN」や「BASIC」などのプログラミング言語を教えられたことがあつたが、全く身に着かず、コンピュータ嫌いになつたのである。長い間、「98」を買つても「太郎」を使うのがやっとというレベルを抜け出すことはできなかったのである。

このような私が、今やコンピュータなくては研究・教育が考えられないようになったのは、コンピュータを利用して上述のようなことをやりたいという明確な目的があつたからである。これを可能にしたのは、安価で高性能のコンピュータと使いやすいソフトウェアの発達した、ここ数年のことである。

情報教育と情報発信の重要性

私たちは、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌と必要以上の情報供給源に囲まれており、本当にこれ以上の情報は必要ではないという人は多いと思う。確かに情報を受ける側に立てば、私たちは情報の渦のなかにあり、それに押し流されるような状況にある。

しかし、情報を受ける側の立場でも、一方的な情報の受け手としてのみではなく、発信者との双方のやり取りによつて、瞬時に世界の各地から必要な情報を自由に選び、しかもきわめて安価に(見かけ上はほとんど経済的に負担することなく)入手できるとしたら話は別であろう。誰かが少し教えてくれれば、どんな不精な人でもこれが容易に行へる状況にあるのである。

そして、もっと重要なことは、誰もがネットワーク上でかなり容易に情報の発信者になれるということである。

よいか悪いかは別として、大学人としてこのようなネットワークを使つてどのような情報を社会に提供しているかが評価の対象となる日は近いと考える。その時のために、今は

自分は情報化には関わりがないと考えている人たちも、情報化について真剣に考えるべき時期に来ているのではないかと思うのである。

広島大学の情報化の方向は?

広島大学の情報化にあつてはまず望みたいのは、構成員のみんなが自由に情報化に参加できる環境を整えてほしいことである。それにはまず、総合情報処理センターの主な任務を一部の大型コンピュータの利用者のためのサービスから、多くの不精な、あるいは不慣れた構成員のための情報化サービスに切り替える必要がある。そして、構成員(教職員と学生)全員に退職や卒業まで電子メールやWWWを利用できるようにするため、更新する必要のないIDを構成員になつた時点で自動的に与えるべきである。

教養的教育としてなされるであろう情報教育は、超初心者を対象として必要最小限のものを実施して欲しい。コンピュータとインターネットを使うとどんな楽しいことができるか、どんな役に立つことができるかを教えて欲しいのである。

このようなクラスには、これまであまり情報化に関わりなかつた教官がまず参加し、研究・教育に情報化がいかに必要なものかを体験して欲しい。そうでなければ、学生たちにどのような情報教育が必要かすら判断できないのではないのか? この点では、六十の手習いでインターネットを積極的に利用し始めた学長に大いに見習うべきところがある。

学生はおもしろく役に立つということがわかれば、あとは各自が目的に応じて勝手に習熟するものである。ワープロやグラフィックのソフトの使い方はビジネススクールで

教えることだ、などとは言わないで欲しい。コンピュータを使う明確な目的もなく情報処理教育に参加する学生に、最初からプログラミング等を教え、コンピュータとは難しいものという印象を与えるようなことは間違ってもやって欲しくない。このような教育が必要などころは、学部の専門基礎教育として別個の授業でやって欲しい。

電子メールの使い方にしても、TELNETなどのようなインターネットにのるまでいくつかの難解な命令をキーボードから入力しなければならぬような面倒なものは使わず、私が使っているEUDORAのような簡便なメールソフトの使い方を教え、その設定を総合情報処理センターに手助けして欲しい。マウスを一回クリックするだけでもインターネットの世界というような環境整備と教育が必要である。

また、いかに有用な情報教育がなされたとしても、それを受講した学生が自由に情報機器が使える環境になれば知識は宝の持ち腐れとなり、やがて興味を失い、知識も薄れることになる。情報教育を実のあるものにするには、キャンパスの所々に学生が自由に使える情報機器を設置し、その利用を促す必要がある。

ネットワークを通じて学生が自由に情報をやり取りできる情報端末ボックスなるものが、電話ボックスより広島大学には多いと言われるようになればよい。これも無線化が進み、五年後にはもう古いと言われるようになるかもしれないが……

おわりに

広島大学の情報化が誰のためのものである

べきか、という問いには、迷わず私のような不精者のためであるべきであると声を大にして応えたい。間違っても、多くの構成員にとって使いにくい、役に立たない情報化になつてはならないのである。

あなたが利用するとせざるに関わらず、情報化の費用は負担することになるのだから。
(なかた・たかし)

脚

TELNET 他のパソコンなどを利用するためのソフトウェア

EUDORA 「マッキントッシュ」の上で動く電子メールのソフトウェア

インターネット 一九七〇年代半ばに、米国防総省の高等研究計画局は、研究者同士のコミュニケーションを円滑にするためにネットワークが必要であることを認識し、米国内の大学を中心にネットワーク化が図られた。やがて世界中に広がり地球を覆う巨大なネットワークに成長した。これがインターネットである。いわばネットワークを数珠状につないだものといえる。

WWW (World Wide Web) ネットワーク上に離散するさまざまな情報を、誰もがアクセスできる情報として公開するためのメカニズム。スイスにあるCERN (European Laboratory for Particle Physics) が始めたものであるが、あつというまに世界中に広まった。インターネット上にクモの巣を張るように情報のリンクが張り巡らされるため、この名前が付けられた。

総合情報処理センター

最近のネットワーク利用について思うこと

西村 浩 二

はじめに

ここ半年か一年くらいの間に随分とインターネットという言葉が新聞や雑誌を賑わせ、世間にも馴染んできたこともあつてだろうか? 「今回の特集は広島大学の情報化についてだから、君が書きなさい」と、総合情報処理センターにいるという理由だけで筆を執らされるはめになった。



事実、総合情報処理センターは、本学でもその世界における最先端の場所にあると言つても過言ではないだろう(そのすばらしい環境に置かれている自分に気がついて鳥肌が立つこともある)。が、それゆえに現在のインターネットにおける問題が、単に技術的なことだけに収まらなくなってきたことを感ぜずにはいられないのである。

そこで、現在HINET (Hiroshima university Information Network system) 広島大学情報ネットワークシステム) という小さなネットワークで起こっている問題と、巨大に発達したインターネット上で実際に起こっている問題をいくつか取り上げる。もちろんこの場で結論が出るはずもないが、現在の、また今後の本学における情報化への取り組みに何らかの形で残せるよう、読者のみな

さんにも考えていただきたい。

あなたは誰?どこの人?

一昨年に整備されたHINETも、一年の運用期間を経て、ようやく多くの方々に使われるネットワークに成長してきた。総合情報処理センターにあるユーザエントリマシンにおける六月の電子メール配送量は五九〇〇〇通にのぼり、過去最高の記録を更新し続けている。一方、電子ニュースも一日に二〇〇〇件を超えるアクセスが記録されている。

また最近では、文学部をはじめいくつかの学部生を対象として情報処理教育も行われるようになってきた。

こういった現象は、ネットワークの管理・普及に努めている者としては非常にうれしいことではあるが、一方で心配なことも多くなってきた。それは「彼(彼女)らを外のネットワークに出して大丈夫だろうか?」ということである。

私がネットワーク(というよりむしろワイヤレスステーション)に初めて触れた頃、先輩からはとにかく気をつけて慎重に使うことを教え込まれた。その頃のワイヤレスステーションは、今から見れば遅く、ちよつとしたことでシステムが停止することもあつたため、「他の人と一緒に使っている」という意識を常に頭に置いておく必要があつた。

今でこそシステムの信頼性は向上し、誰もが我が者顔で使つても少々なことでは停止することもなくなつたが、ネットワークの使い方に関しては、昔も今もさほど変わりが無いように思える。

ここでの一番の問題は、ネットワークにおける利用者のマナーである。メールを使い始めた頃は個人対個人の情報のやり取りが中心